

## 自己と自我についての考察

デカルトのコギトと「客観的自己」

亀山陽司(外務省)

近年、脳神経科学の研究の進展によって、感情と理性の働きを始め、人間の精神活動についての認識が深まってきている。そのため、伝統的に「哲学的」な研究の対象であった人間の心の問題についても、脳神経科学の知見が重視され、いわゆる「科学的」な研究の対象となった感がある。しかし、そのことによって、心の問題を哲学することの意味が失われるのであろうか。

脳神経科学は、心や思考の働きに応じて脳の部位がどのように活性化するかといった研究を通じて、心と脳の関係を研究しているとは言えるが、直ちに心と脳の働きが同じであるとまでは言えない。脳と心は密接に関係していることは間違いないが、それは、脳内の神経物質の伝達や電気信号の伝達が我々の「感じ」や「イメージ」、思考の流れと「同じである」ということを意味するものではない。つまり、脳神経科学の知見は、心の問題を研究するにあたって極めて示唆的ではあるが、そのことが心に関する哲学的な問に置き換わるわけでは必ずしもない。

例えば、著名な脳神経学者であるダマシオは、デカルトの心身二元論を否定し、情動(感情)は身体的な状態そのものであると論じている。つまり、体と脳の全体的なシステムが一体的に働いていることを示し、心と体は別物ではないことを示した。しかし、胸の痛みやときめきといった感情は、単なる身体的な状態にすぎないのだろうか。恋の痛みは、相手の声やイメージと不可分に結びついているはずである。また、怒り、恐れ、喜び、悲しみといった基本的な情動のみならず、人間は常に何らかの情調の中に浸されている。それは、秋の高い空を見上げた時に自分の心が置かれる少し寂しげで爽やかな情調、といった一言で表現できないようなものを含む、きわめて多様な心的状態である。だとすると、感情(情調)や思考といった心的働きを何か身体的な物理的状态に還元することは、人間の心を研究する上で、必ずしも有効な手段とは言えない。

むしろ、デカルトが発見したコギトについて改めて考察してみることが必要である。「われ思う、ゆえにわれあり」ということで、デカルトが見出したものは、明晰判明な「我の存在」、「思惟する我」である。存在するものは客観的なものであるはずである。なんとすれば、主観的にしか存在しないものは存在とは呼ばないから。とすれば、デカルトが思惟する我(=自我)を見出したということは、すなわち「客観的存在」としての自己自身を見出したということである。ここに「客観的自己」という、一見形容矛盾の概念が現れる。この客観的自我こそが、デカルトが延長であるところの身体とは独立して存在すると考えた思惟に他ならない。客観的でありながら、延長を本質とする物的存在者とは異なる存在者であるところの思惟する我である。デカルトの真意とは、「私」とは主観的なものではなく、現に存在するもの、すなわち客観的なものであるということに他ならない。

ここで、デカルトにおいて「われ」とは、思惟するものとして明晰判明に知られるものである。他方、デカルトの場合、このように明晰判明に知られる「われ」に対し、知覚・感覚、内感についてはまずはその明証性を否定する。しかし一般には、人間が直接に感じる知覚そのものについては明晰判明に知られるものと考えられている。このように知覚・感覚を与えられるものとしての自己が存在する。自己は第一に知覚によって外界たる環境と境界

を接する物理的存在である。この際、知覚される対象は私の外にあるものであるが、それは知覚・感覚を通じて知られるものであり、知覚・感覚はまさに環境と私自身との境界にある。つまり、自己は知覚の上に存在する。因みに、いわゆる自分の身体状態に関する知覚である内感についても、自己にとっては環境である。あらゆる知覚は、環境と自己を境界づける。

また自己は、五感を通じた知覚のみならず、感情、情調を感じずる。これも一種の感覚であると考えられる。他方で感情や情調というものは、自己を境界づけるという特徴を持たない。感情は何かと自己とを分離するものではなく、むしろ自己を侵しつつ、あいまいに広がるものとしてある。ある感情にとらわれ、「我を忘れる」とか「我を失くす」とか言われることからわかるように、激しい感情はむしろ自己を強く捉え、さらに外へ外へと浸出していくものである。ハイデガーは「存在と時間」において、気分において現存在は己に直面すると言っているが、むしろ気分、情調というものは、自己を世界に溶解させるように思われる。

次に思惟である。思惟は、言語的に考えるということであって、これは心的システムとも言うことができる。心的システムは我々が通常考えるのと異なり、連想的であり、自動的である。これは夢や統合失調症といった例を見れば、想像がつかだろう。一種のシステムとして時に反応的に、時に意志的に作動するものである。我々は自分が考えているのと異なり、極めて受動的な存在である。我々の行動は、思惟も含め、自動的な性格を有している。このような自動的な心的システムは、言語やイメージを介して「世界を観想する」。このように観想される世界は、知覚によって与えられる物理的「環境」を基礎として、言語的に構造化され、意味づけられた「世界」である。このように、心的システムは「世界」を有している。心的システムは、自己を境界づけるものではなく、自己のうちに「世界」を展開するカント的超越である。すなわち、思惟は自己を限定するのではなく、「世界」を観想することによって自己のうちにすべてを取り込む。また、自動的な作用体であることによって、カント的超越ではあってもデカルト的コギトではない。心的システムは、全て(世界)を包摂するものとしてフィヒテの絶対的自我を想起させる。

では、デカルトのコギトとは何か。それは以上に述べた3つの相から見られた自己とどのような関係にあるのか。上記3層の自己は、いずれも「外的」である。知覚は環境と接するところにあり、自己にとって外的である。また感情、情調、気分についても、自ら呼び覚ますものではないという点で極めて外的、他者的なものである。これらは外から到来する何者かである。また、心的システムは、それ自体では外部を有していない。心的システムが、自らの展開する「世界」の中に、自己自身を見出すとき、その「世界」に内部と外部とが仕分けられるが、いずれもその世界に内在するものである点に変わりはない。

このように、知覚的自己、感情的自己、そして思惟的自己は全て外的なものである。これらは、外的に与えられたもの、外部から到来したものとして、つまり「在るもの」として「客観的自己」である。デカルト的コギトとは、まずは思惟するものとしての「在るもの」としての自己である。と同時に、それを見出す「われ」でもある。「われ」を見出す「われ」とは、何であろうか。これは、上記の3層の自己を自己自身として「生きる」ものとしての「自我」ではないだろうか。